

# 2004年度農村計画委員会活動報告

美しい日本を守り育て作る  
環境共生の知恵・地域に固有の文化

# 農村計画の対象エリア

北緯45°

国土面積 3,778万ha

総人口 12,770万人

東経123°

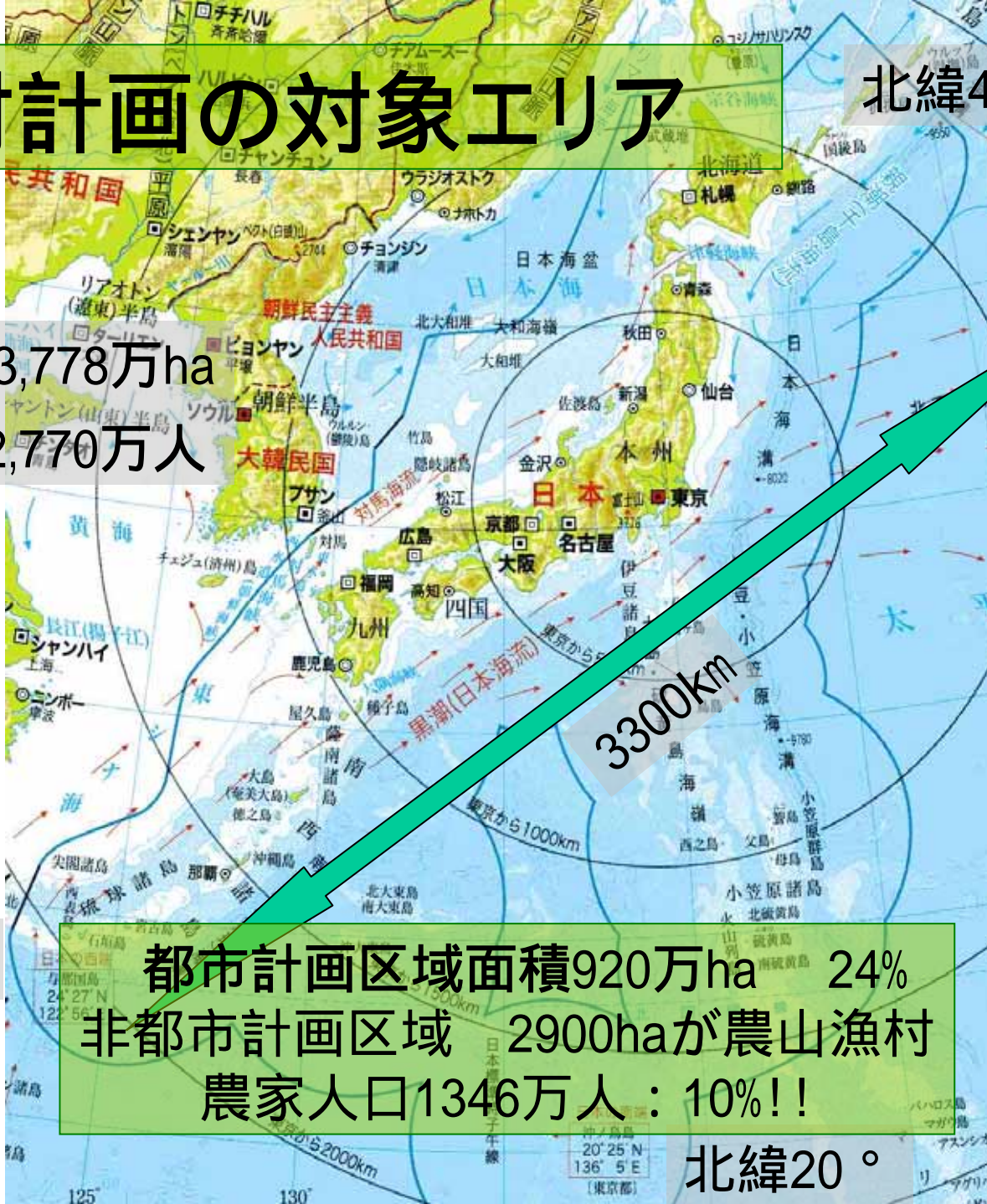
都市計画区域面積920万ha 24%

非都市計画区域 2900haが農山漁村

農家人口1346万人：10%!!

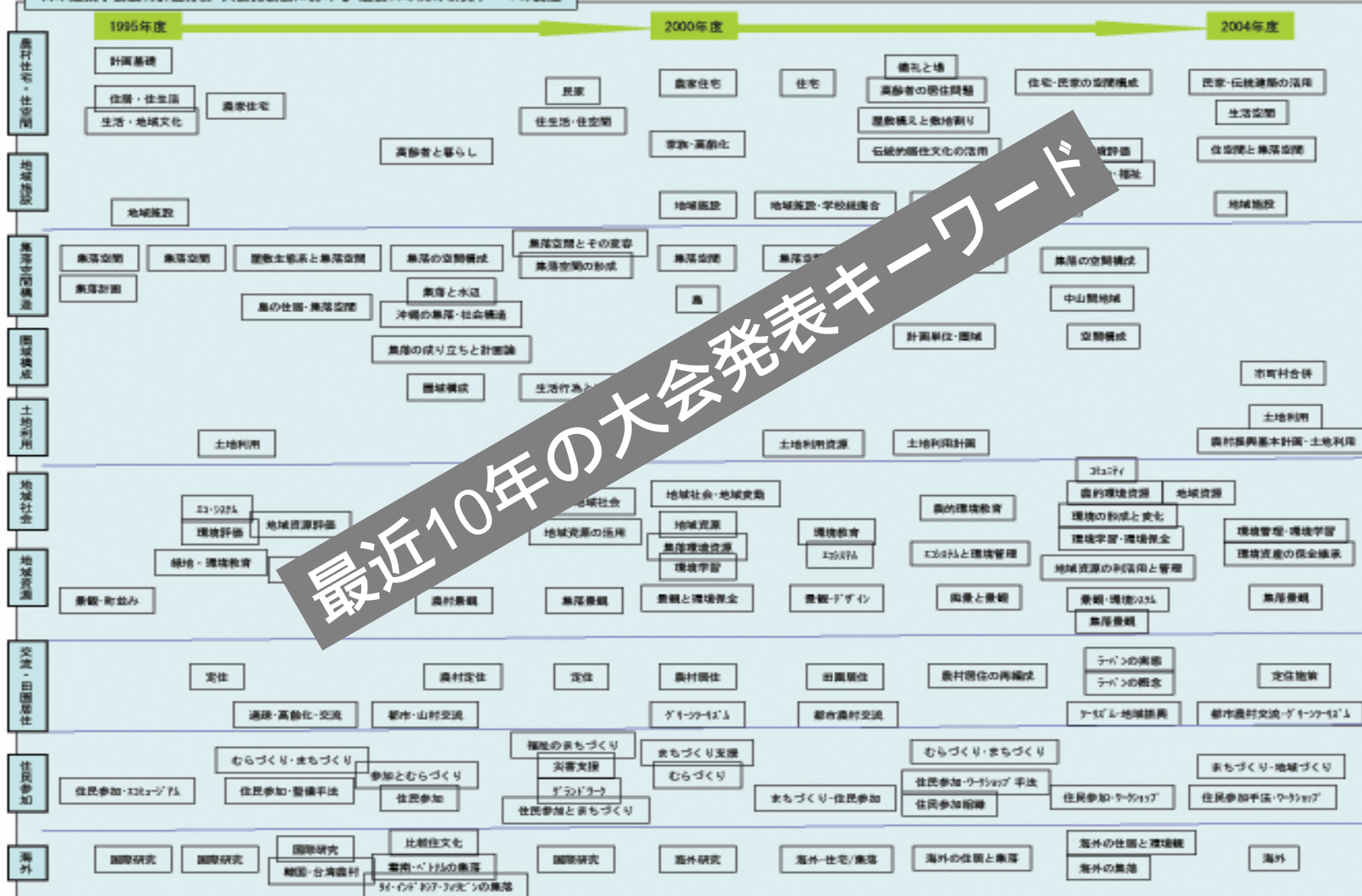
北緯20°

東経154°



# 農村計画・研究のキーワード

日本建築学会農村計画分野 大会発表会における 過去10年間の研究テーマの変遷



最近10年の大会発表キーワード

※大会発表冊に使用するセッション名は1996年度から存在する（各セッションの論文数は5-10題程度、各年計40-100題程度）。図は、テーマ（キーワード）として各年度のセッション名を利用した。（作成：斎藤）

民家・伝統建築の活用

民家

住空間と集落空間

農村振興計画

生活空間

住環境

地域コミュニティ

地域施設

海外の住居と集落

環境管理

市町村合併

環境学習

環境資産

環境資産保全継承

地域資源

中山間地域

ラーバンの実態

集落景観

エコシステム

定住政策

都市農村交流

グリーンツーリズム

むらづくり

住民参加

ワークショップ

まちづくり・地域づくり

土地利用

最近のキーワード

# 農村計画委員会組織

農村計画メンバー / 自薦・他薦・公募 / およそ120名 ( 会員数37000人の3% )

本委員会 / 70定年2期4年ローテーション / 35名

農村計画情報交流小委員会 / 10

農村計画システム小委員会 / 12

田園建築・景観デザイン小委員会 / 14

農村エコシステム小委員会 / 15

集住文化小委員会 / 15

ラーバンデザイン小委員会 / 15

ラーバン出版企画WG

環境教育研究会/12

農村企画  
WG

ルーラルネット  
WG

アジア農村  
フォーラムWG

## 農村計画情報交流小委員会 / 10

国内外の農村計画上の学術情報交流の拠点を形成する  
わが国の農村集落のデジタルアーカイブを作成する

ウェブ上に「美しい農村集落デジタルアーカイブ」作成  
農村集落における国際的なデザインワークショップを支援  
支援する

## 農村計画システム小委員会 / 12

農村・都市を連続的に対象とする新たな計画システムの構築  
都市及び縁辺部の空洞化、過疎地域崩壊の危機に対応

## 農村エコシステム小委員会 / 15

人間活動によって支えられる農村エコシステムの全体像  
の解明

集落域におけるエコシステムの全体像の解明

農村エコシステムを持続的に維持するための計画論確立

## 田園建築・景観デザイン小委員会 / 14

田園建築の地域特性と環境共生的・生活文化的な建築のデザイン手法に関する調査研究  
ヴァナキュラー性を有する田園建築について、事例分析による21世紀の建築像を検討  
建築とランドスケープの調和した景観形成に資するデザイン・計画手法についてのシンポ開催

## 集住文化小委員会 / 15

多民族が居住するアジアに残されている自然環境と人間との共生 / 自然環境を持続的、循環的に活用 / アジアの多様な集住文化について計画論的視点から比較分析 / 健康で快適な生活環境を形成

アジアの集住文化に関する研究成果の資料収集・整理

## ラーバンデザイン小委員会 / 15

日本型ラーバンの研究フレームの整理

海外事例に見るラーバンの要件整理

ラーバンデザインのためのコンセプト構築

ラーバン実現化のための諸問題の検討

ラーバン出版企画WG

## 環境教育研究会 / 12

科研「児童生徒の農的体験を通じた環境教育に関する研究」（平成11 - 13年度） 2002年度大会研究協議会「子どもの農的体験からみた学校・地域環境づくりの新たな展望」の成果を踏まえ、出版企画、編集、公開研究会を通し、環境教育の普及



04年度農村計画委員会予算

136.6万円

全国の会員 & 各地の農村計画メンバーとの研究交流

地方で  
公開の  
研究会

農村計画メンバーへのメイリングの充実  
ホームページの充実

ホームページ・メイリングの充実

ルーラルネット

WG

委員長便り

	20041211	NO.7	
20041124	NO.6	20041012	NO.5
20040921	NO.4	20040703	NO.3
20040512	NO.2	20040410	NO.1



### 農村計画委員会

#### Rural Planning Committee

- 委員会組織の沿革・概要
- 委員会規程
- 委員
- 委員会議事録

- 大会関連
- 学術研究会関連
- 環境教育科研

- 委員会構成
- 各支部
- 関連リンク

- AIJ電子フォーラムへ
- シンポジウムなど
- メーリングリスト

- 刊行物など

- 日本建築学会
- 日本都市計画学会
- 農村計画学会
- 日本造園学会

Copyright (C)2000-2004 Architectural Institute of Japan/Rural Planning Committee  
 ご質問・ご意見は  
 ルーラルネットWG  
 shibata@nishitech.ac.jpまで

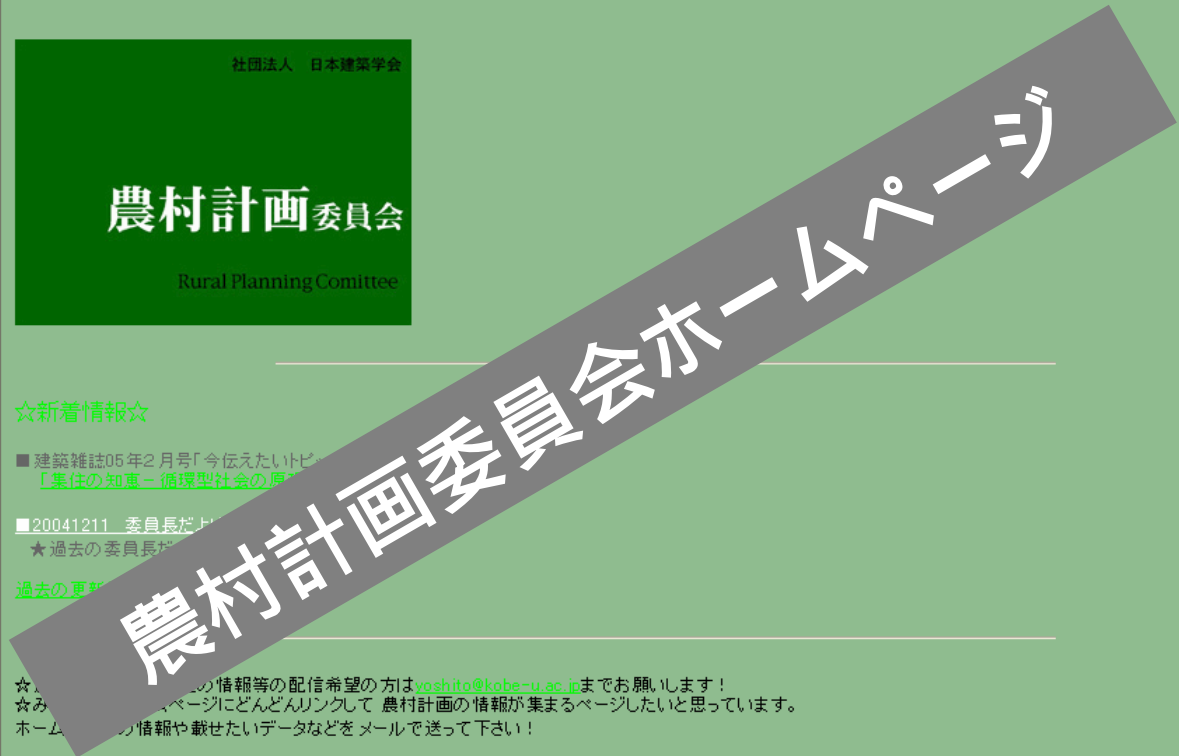


#### ☆新着情報☆

- 建築雑誌05年2月号「今伝えたいトピ」  
「集住の知恵-循環型社会の原動力」
- 20041211 委員長だより  
★過去の委員長だより

#### 過去の更新

☆...の情報の配信希望の方は [yoshito@kobe-u.ac.jp](mailto:yoshito@kobe-u.ac.jp) までお願いします！  
 ☆...ページにどんどんリンクして 農村計画の情報が集まるページしたいと思います。  
 ホーム...の情報を載せたいデータなどをメールで送って下さい！



# 美しい集落 - 私のフィールドノート

公開研究会 04年6月 学会会議室

## 本委員会

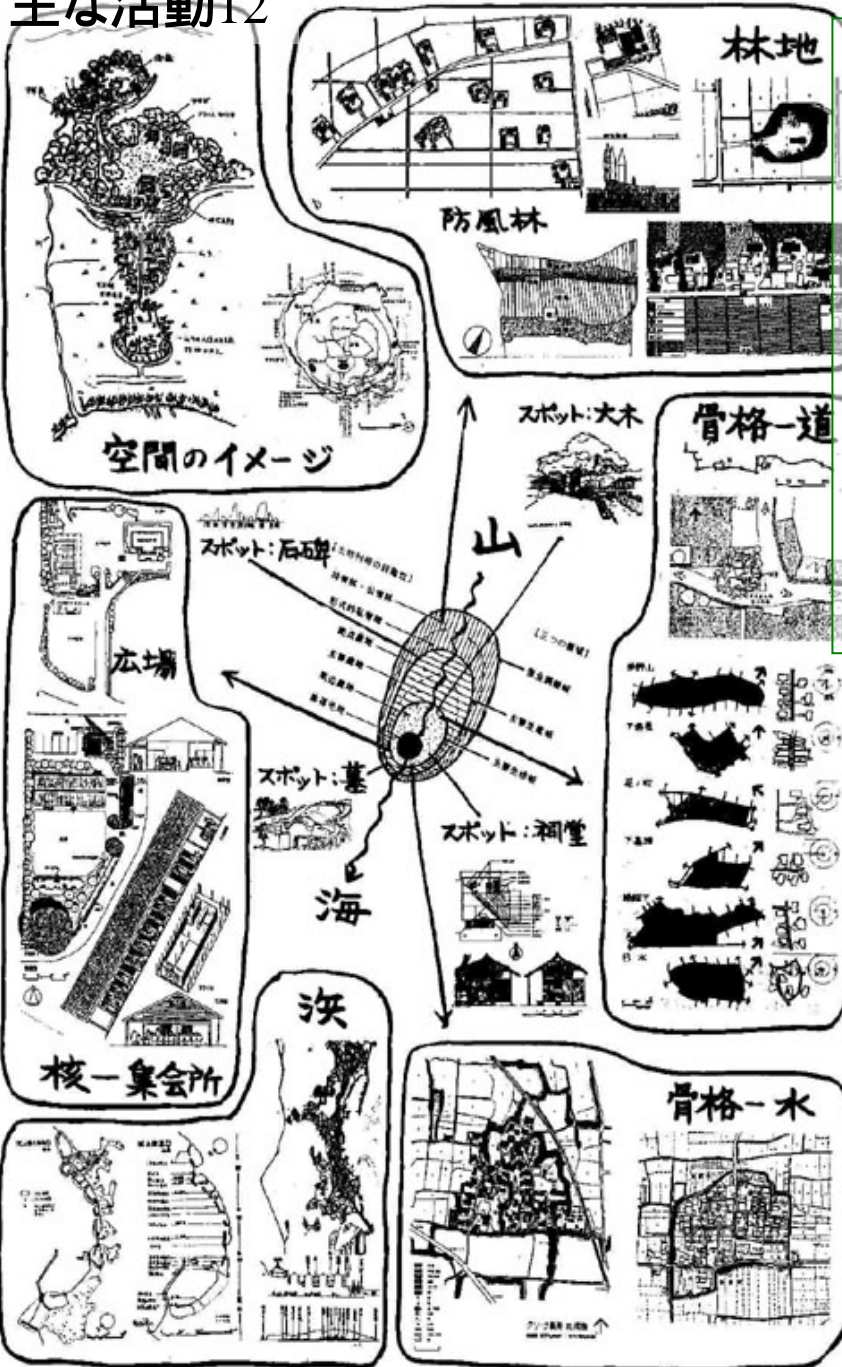
集落研究はフィールドに始まってフィールドに終わると言っても過言ではない。今和次郎をはじめとする膨大な先人のフィールドノートを手本に、調査研究が展開してきた。

春季学術研究会では、若手研究者のフィールドノートを中心に、新しい視点、新しい発見、最新の成果について報告を受け、集落空間の魅力を一語一句記述する方法について共通の認識を深めた。



30余名の参加者が  
フィールドノート発表





農山漁村集落それぞれが固有の文化を有し、それを読み解くためにさまざまな工夫がなされてきた。フィールドには、机上では理解しがたい多様な営みがあり、フィールドから学ぶことは数知れない。それを書き記したフィールドノートそのものも、文化的存在といってもよい。

一般会員・大学院生から高い関心

一般・若手の関心になかった研究テーマ  
若手の研究動向の把握  
農村企画  
WG

フィールドノートを収録し出版を検討

일본의 농촌과 건축 일본 동북 지역

# 日韓學術研究会 04年7月 東北工業大學 本委(+農村建築研究会)



**重村副学会長の挨拶のあと、  
韓国「韓国・太白山間ヨカンジブと  
ツロンジブの住居空間構成の比  
較研究」  
日本「曲家保全から村づくり研究  
会へ」を発表  
40名余の参加者全員が研究紹介  
韓国研究者は東北の農村視察**



広くアジアに視野を広げ、  
共通のテーマで研究交換  
・国際交流をはかる  
**アジア農村フォーラム**  
WG

来年度は、韓国で、  
ラーバン小委が近郊開発を  
テーマに研究会を予定

韓国農村建築学会と農村計画委員会の交流は1991年に始まる。

韓国の経済発展に伴い、  
日本の農村整備が手本とされ、  
さらに共通の課題について研究交換が始まった。

当初は不定期な交流だったが、

2001：韓国・南部

2002：日本・九州

2003：韓国・清州

2004：日本・東北

と相互訪問の研究会が定着。

# 住民自治を問い直す

現地研究会 04年5月 長野県野沢温泉村  
農村計画情報交流小委



全国で合併が進むなか、旧村や集落を単位とする小さな住民自治組織のあり方が模索されている。長野県野沢温泉村の住民自治組織である野沢組(リーダー・河野正人氏)の活動を現地調査。

北海道大会農村計画PD



# 山に暮らす - 集住の知恵 9

公開研究会 04年7月 宮崎県諸塚村

集住文化小委



日本を始めアジアの各地には、地域に固有の環境と共生し、持続的な環境が形成され、良好な共同体を維持しているすぐれた集住地が数多く見られる。集住の知恵を読み解く公開研究会は9回目で、山に暮らす知恵について地元研究者を交え、研究交換をした。

成果を集約・05年出版





今伝えたいトピックス

集住の知恵

循環型社会の原理を読み解く

農村計画委員会  
集住文化小委員会

岡田知子  
農村計画委員会委員・東京工科大学農山村計画・高日本工科大学助教授  
伴文正志  
集住文化小委員会委員・筑波大学大学院農学系助教授  
伊藤謙一  
農村計画委員会委員・東京工科大学農山村計画・高日本工科大学助教授

日本を含むアジアに関する研究成果の蓄積が進むなかで、その集住文化の多様性、多表性とともに共通性、類似性、関連性が明らかになってきている。そのなかで現代計画学からみて注目すべき点は環境と共生し、持続的な環境形成がなされ、良好な共同体を形成している、という点にある。このようなアジア的集住の仕組みは、これまでの建築、地域、環境計画学の前提となっている近代計画学とは大きく異なるものであり、現代計画学に有益な示唆を与えたと考えられる。

集住文化小委員会では各地に継承されている多様な集住文化について計画論的視点から比較分析し、地域の環境資源として評価し、集住の知恵として次世代に伝えていきたいと考えている。その一環として各地に継承されている集住の知恵をテーマに現地で公開研究会を開催し、その成果を集住の知恵キーワード集として広くその価値を共有する活動を行っている。集住の知恵の意義があると考えている。①環境共生の知恵が、新たな建築デザインに適用される。②その地域に固有な文化表現を再発見し、地域振興の企画の設計になる。③集住の知恵の調査を地域住民の記憶を掘り起こし、地域コミュニティや郷土愛を育む。④収録した集住の知恵を広く公開することで、技術交換、異文化交流のきっかけになる。などである。現在、60〜70キーワードを整理し、刊行に向けて準備を進めている。キーワードの説明とともに現代計画学の視点からみて評価すべき点、学ぶべき点は何かについて、わかりやすく記述することに努めている。そのなかから一部を紹介したい。



「ばったり」  
新り積み式の屋根掛けで、上げ下げの時に「バツクリ」と言がすことからの呼称。同様の形式のものは各地で見られ、あびみせ、アゲ取し、アゲ棚、繰り店、アゲ縁、ぶっちょ、ミセなど呼ばれている。京都の町屋にみるあびみせはならび、四阿の縁材にみられる「ミセ」や「ぶっちょ」はよく保存されているため、徳島県手島島で阿波のまちなみ研究会と共催し、「ミセ」に注目し、集落が織りなす絶妙の空間構成について現地見学および公開研究会交流会を実施した。一般参加も加わり地元の新聞社と放送局の取材を受けた。など強い関心が示された。このキーワードはその集住の知恵に込められたものである。

「ミセは上ミセ、下ミセの上下二階構造。上ミセは居住空間として、下ミセは倉庫として使われていた。空間は開放的で、自然に降りてきた風が通り抜けていく。また、雨は屋根の裏側に落ちて、排水溝を通じて外へ排出されていた。また、通りの公的な空間と内側の私的な空間をつなぐ空間を形成しており、人を招きよせるコミュニティスペースとしての役割を果たしている(一写真)。

「黒松」  
出雲地方では、冬の強い西風から散居の屋敷を守るため、屋敷西側を中心に屋敷林が植えられ始めた。自然堤防上の古い民家ではタブ、シイなど常緑樹が多く見られるが、散居の位置する沖積地は塩分があるため黒松が植えられるようになった。さらに、沖積地の土壌が不安定で薪木は強風で倒れやすく、薪木の日照により木田の取量が影響が出るようになってきた。また黒松の枝葉は燃料としても使える。ということで、黒松は屋根の屋根ほどの高さで

「結」  
ゆい、もやい、ゆいまる。手回しなど地方によって名称は異なるが、村人が共同で農作業や環境整備に携



「茶地松」  
出雲地方では、冬の強い西風から散居の屋敷を守るため、屋敷西側を中心に屋敷林が植えられ始めた。自然堤防上の古い民家ではタブ、シイなど常緑樹が多く見られるが、散居の位置する沖積地は塩分があるため黒松が植えられるようになった。さらに、沖積地の土壌が不安定で薪木は強風で倒れやすく、薪木の日照により木田の取量が影響が出るようになってきた。また黒松の枝葉は燃料としても使える。ということで、黒松は屋根の屋根ほどの高さで

「茶地松」  
出雲地方では、冬の強い西風から散居の屋敷を守るため、屋敷西側を中心に屋敷林が植えられ始めた。自然堤防上の古い民家ではタブ、シイなど常緑樹が多く見られるが、散居の位置する沖積地は塩分があるため黒松が植えられるようになった。さらに、沖積地の土壌が不安定で薪木は強風で倒れやすく、薪木の日照により木田の取量が影響が出るようになってきた。また黒松の枝葉は燃料としても使える。ということで、黒松は屋根の屋根ほどの高さで

「茶地松」  
出雲地方では、冬の強い西風から散居の屋敷を守るため、屋敷西側を中心に屋敷林が植えられ始めた。自然堤防上の古い民家ではタブ、シイなど常緑樹が多く見られるが、散居の位置する沖積地は塩分があるため黒松が植えられるようになった。さらに、沖積地の土壌が不安定で薪木は強風で倒れやすく、薪木の日照により木田の取量が影響が出るようになってきた。また黒松の枝葉は燃料としても使える。ということで、黒松は屋根の屋根ほどの高さで

剪定されるようになった。この剪定を地元では勝手刈(うごり)と呼び、剪定された黒松の屋敷林を茶地松と呼んでいる。勝手刈は5年ぐらいごとに専門の職人が行い、茶地松は従うように力強い整った形に仕上げられた。まさに用の美の景観が形成されたのである(一写真)。

「茶地松」  
出雲地方では、冬の強い西風から散居の屋敷を守るため、屋敷西側を中心に屋敷林が植えられ始めた。自然堤防上の古い民家ではタブ、シイなど常緑樹が多く見られるが、散居の位置する沖積地は塩分があるため黒松が植えられるようになった。さらに、沖積地の土壌が不安定で薪木は強風で倒れやすく、薪木の日照により木田の取量が影響が出るようになってきた。また黒松の枝葉は燃料としても使える。ということで、黒松は屋根の屋根ほどの高さで

「茶地松」  
出雲地方では、冬の強い西風から散居の屋敷を守るため、屋敷西側を中心に屋敷林が植えられ始めた。自然堤防上の古い民家ではタブ、シイなど常緑樹が多く見られるが、散居の位置する沖積地は塩分があるため黒松が植えられるようになった。さらに、沖積地の土壌が不安定で薪木は強風で倒れやすく、薪木の日照により木田の取量が影響が出るようになってきた。また黒松の枝葉は燃料としても使える。ということで、黒松は屋根の屋根ほどの高さで

「茶地松」  
出雲地方では、冬の強い西風から散居の屋敷を守るため、屋敷西側を中心に屋敷林が植えられ始めた。自然堤防上の古い民家ではタブ、シイなど常緑樹が多く見られるが、散居の位置する沖積地は塩分があるため黒松が植えられるようになった。さらに、沖積地の土壌が不安定で薪木は強風で倒れやすく、薪木の日照により木田の取量が影響が出るようになってきた。また黒松の枝葉は燃料としても使える。ということで、黒松は屋根の屋根ほどの高さで

今伝えたいトピックス建築雑誌05年2月

# 北海道大会農村計画協議会

環境資産活用の多面的な展開方向

## 環境資産活用の多面的な展開方向 - 地域自立への挑戦 - 本委(協議会企画)

日本建築学会農村計画委員会

2004年8月

昨年度大会協議会で環境資産について議論を深めたのに続き、今年度は持続的な農山漁村経営を実現していくために環境資産をどのように活用するかについて、しりべつ川、下川町、鹿追町、エコミュージアムを事例に議論を深めた。



# 北海道大会農村計画PD

## 住民自治の表現としての地域デザイン 農村計画情報交流小委

### 住民自治の表現としての 地域デザイン



2004年8月  
日本建築学会農村計画委員会

平成の大合併を視野に入れながら、かつての町や村のコミュニティをになってきた住民自治の意義を見直し、住民自治による地域資源の活用、地域外の介入の分散化、地域の能力に応じた活動が内発的発展を促していくことについて議論を深めた。

# 循環型地域づくり

現地研究会 04年9月 北海道下川町

農村エコシステム小委(+ 農村建築研究会)



過酷な自然条件、社会条件、経済条件のもとで、地域資源を活かし、人材を育て、内外に発信を続けてきた下川町の地域づくりは内発的発展や循環型地域づくりのモデルとして高く評価されている。今回の現地研究会では下川町における循環型社会の到達点と課題を学んだ。



エコシステム論集の検討 刊行

# エコロジカルな環境再生 公開研究会 04年11月 神戸大学

## 環境教育研究会

MS 講演&ワークショップ

ドルトムント大学教授

### Ekhart Harn

"Environmental Education and Urban  
Re-ecologization in Germany"

講演要約

1947年オランダ・シネンゲン生まれ。1970年ベルリン工科大学建築・都市計画学専攻。1972年ドルトムント大学（ドイツ）環境計画研究科長。2001年に神戸大学で開催された国際シンポジウム「多様な山の環境再生の推進」(SDE2001)において基壇講演を行う。  
1970年代後半、社会やコミュニティへの影響の理解を促し、アメリカや中国での研究員経験を経た後、環境問題を都市計画と結びつけた「エコロジカルな都市再生」や都市計画に参画する。ケルリン科学センターやエコロジカル都市再生・エコロジー建築などのディレクターとしても活躍。  
主な著書に、共著『エコロジー都市再生』(共著者：山崎肇)、『都市再生とエコロジー』(『Eco-city 1999』No. 153)、株式会社ビオシティ、など。

司会 重村力

話者提供 1  
西田和美 (明石工業高等専門学校 建築学科助手)  
『露天掘り炭坑跡地における自然再生プロジェクト』

話者提供 2  
内平隆之 (神戸大学大学院  
日本学術振興会2100E特別研究員)  
『都市再生へ向けた環境活動拠点施設の取り組み』

日時  
11月19日(金) 午後2時～5時

場所  
神戸市灘区六甲台町1-1  
神戸大学・自然科学総合研究棟  
3号館125号室(1階東)

主催  
神戸大学21COE 安全と共生のための都市デザイン戦略  
日本建築学会 農村計画委員会環境教育研究分  
会  
近畿支部農村計画部会

問い合わせ先  
神戸大学工学部 山崎肇  
Tel: 078-803-6283 E-Mail: yamazaki@kobe-u.ac.jp

エコロジカルな環境再生 ―ドイツの挑戦―

ドイツにおける都市のエコステーションを始めとする新たな都市のエコロジー化の取り組み、廃鉱を環境アートで再生する取り組みについて公開研究会を開き、環境教育と一体になった環境再生の新たな動きについて意見交換をした。

環境教育に関する出版化の検討



# 中越地震緊急報告

公開研究会 05年1月 学会会議室

## 本委員会

新潟県中越地震では、農山村に点在する小規模集落が交通網、通信網、電気・ガス・水道などのライフラインが大きな被害を受け、孤立集落が発生するなど、集落型災害への対応の緊急性が痛感された。そこで、現地の状況を報告していただき、農村計画が取り組む課題について意見交換をした。

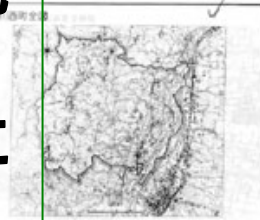
新潟県中越地震 農村地域自治災害対応能力調査  
(中間報告)



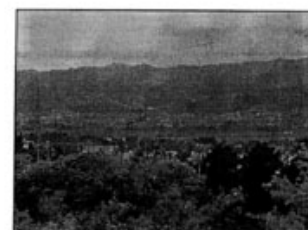
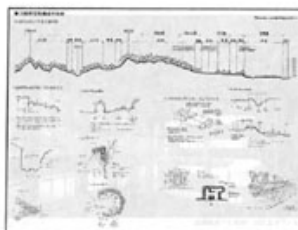
新潟県中越地震農村地域自治災害対応能力調査グループ  
(林大倉長研究室+昭和女子大東洋研究室)  
舟長浩司、浦上健司、前野真吾、瀧田種子

2005年1月8日  
新潟県中越地震農村地域自治災害対応能力調査グループ  
報告書作成

新潟県中越地震報告



災害復旧特別研究  
委員会へ活動を発展



近畿大会PD

委員会名	農山漁村集落における自然災害復旧支援計画特別研究委員会	中越地震総合研究小委員会
目的	農山漁村における自然災害に対する防災・避難・復旧事例を収集・整理のうえ、支援の方策について検討し、提言としてまとめる	阪神淡路大震災に関する提言を検証しつつ、新潟県中越地震災害に対する対応、復興について総合的に検討し、提言としてまとめる
対象	農山漁村集落における台風・地震・津波・洪水・土石流などの自然災害	新潟県中越地震
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集落災害の特徴</li> <li>・過疎、高齢化と災害</li> <li>・避難施設の規模・立地等</li> <li>・仮設住居のあり方</li> <li>・地域コミュニティの働き</li> <li>・集落型復旧支援 その他</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・阪神淡路震災提言の検証</li> <li>・疎住地震災の課題と対策</li> <li>・新潟中越震災の復興支援</li> <li>・疎住地・中山間地、豪雪地災害における生活再建</li> </ul>
委員長	伊藤庸 (予定)	重村力 (主査)
期間	05年度 (4年度)	05年度～06年度
予算	175万円 (2年・報告書含む) +	
大会協議会	<p>大会2日目・午前                  農村計画委員会+特別研究委員会によるPD「<b>農山村集落の災害復旧支援を考える</b>」                  主題解説(案)                  農山村型自然災害の特徴                  農山村集落における避難施設                  農山村集落における仮設住居                  集落型災害の復旧・再建計画</p>	<p>大会3日目・午前                  学術推進委員会・中越地震総合研究小委員会による「<b>中越地震・中山間地域の大規模災害が示す社会的課題</b>」                  主題解説(案)                  現地から地域被害の特徴                  災害委員会からの物的被害の特徴                  農村計画委員会から                  都市計画委員会から                  構造委員会から                  歴史意匠委員会から                  阪神淡路の経験から</p>

農村計画委員会・都市計画委員会・構造委員会を  
 はじめ、建築学会の総力を挙げて取り組む

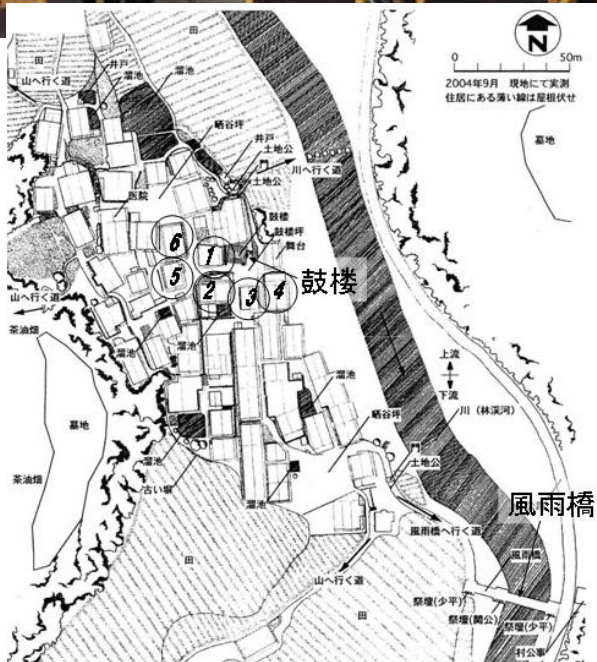
# 共生の仕組み 空間概念と構成

公開研究会 05年2月 学会会議室

## 集住文化小委

東アジア各地の集住文化を対象に、共生の仕組みを探ろうとする、新たな研究展開である。科研費をベースにした調査研究を開始しており、その一部である中国少数民族・トン族、次年度調査予定の韓国・風水、日本・津軽の集落を事例に、空間概念と構成について研究を交換した。

集住の知恵に続く、刊行を予定





# 農村計画研究の新しい動き

公開研究会 05年3月 学会会議室

本委(農村企画WG) + 関東支部農村建築専門委

最近の若手研究の動向を理解し & 登竜門の機会を設ける  
最近5年分の博士論文・修士論文90テーマを収録

※2005.1-2月に行った近年の農村計画研究テーマ調査により収集されたデータ一覧です。(博士・修士別、年度順)

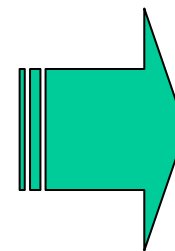
	論文タイトル	著者	大学	年度
博士論文	農山村集落における空間管理の定量化に関する研究ー特にグリーンツーリズムの展開と関連してー	全銀景	東京農工大	2004
	人間と建築・環境との共生の認知に基づいた空間の秩序化に関する研究	根来宏典	日大	2004
	広域的建築物群保存地区制度における武家町の町並み保全手法に関する研究ー青森県弘前市旧町屋保存地区を事例としてー	石川慎治	東北大	2004
	住民参加型地域振興におけるワークショップの適用手法に関する研究	黒岩颯子	宇大	2004
	地域住環境の経年評価と継続活用手法に関する研究	大沼正寛	東北大	2003
	高流動性社会を背景とした過疎地の集落環境の利用管理に関する研究	山崎義人	早大	2003
	農山村地域における住民参画による持続的な土地利用計画策定のための調整支援手法に関する研究	藤沢直樹	日大	2002
	屋敷回り空間の「見え方」に関する研究ー農村集落と都市部住宅地を事例としてー	小野寺淳	千葉工大	2002
	農村地域における地域自然の賦存形態とその活用方法に関する基礎的研究	齋藤亮司	東工大	2002
	地域社会における自治組織形成のしくみと構造に関する基礎的研究	鈴木麻衣子	東工大	2002
	都市・農村交流が都市住民・地域住民の「生活環境に及ぼす効果」に関する研究	前田真子	奈良女大	2001
	農村地域における商業環境整備に関する基礎的研究ー都市近郊と中山間を事例としてー	青木繁	千葉工大	2001
	アジア稲作地域の生活空間における水利環境と水利用の比較研究	根岸(庭山)由紀	日大	2000
	農村的自治体における地域別計画の策定手法に関する研究	金俊豪	宇大	2000
	農村部における若者の生きがい感を視点とした生活環境評価に関する研究ー中山間及び都市近郊地域を事例としてー	青木秀幸	千葉工大	2000
修士論文	都市近郊農村地域における粗放化現象の空間的特質ーつくば市を事例としてー	今坂隆宏	東京農工大	2004
	3次元GISの画像解析によるフラクタル次元と環境認知との相関に関する研究(伊豆・房総半島における沿岸農村地域の考察)	蝶名林秀明	日大	2004
	地域における圏域の実態とその長期的推移に関する研究	菊池義浩	東北工大	2004
	線引き廃止に伴う用途自地域域の都市的土地利用に関する研究ー香川県高松市を事例としてー	菅原淳也	明大	2004
	田園地域における散策路とマップによる地域づくりに関する基礎的研究	田中琢也	明大	2004
	ライフステージからみる都市・農村地域を往来する家族の活動実態ー長野市鬼無里地区に居住する親世帯と長野市街地に居住する子世帯を事例としてー	井上千晶	早大	2004
	中山間地域における空き家およびその管理の実態に関する研究ー山梨県早川町を事例としてー	遊佐敏彦	早大	2004
	孤立小規模漁業集落における集落内外連携の発展経緯と課題ー徳島県海部郡由岐町伊座利地区を対象としてー	八幡桃子	早大	2004
	対馬における集落の空間構造と環境観に関する研究ー志多留・田ノ浜集落を対象としてー	堀江加奈子	日大	2004
	参加型地区計画のための大字単位別にみた住民意識の比較考察ー宇都宮市城山地区ー	仲薬志	宇大	2004
	地域自治を促す住民組織形成モデルに関する事例研究ー船橋市K地区での参画調査を通じてー	八木隼	千葉工大	2004
	農村地域における集落社会の構成要素から見た中山間集落活性化の要件	竹腰俊郎	東工大	2004
	農村地域における住民各世代の地域活動から見た中山間地域の活性化に関する研究	白石浩司	東工大	2004
	階段の安全性と快適性に関する建築計画的な研究	尾高大雄	足利工大	2003
	介護保険サービスに対応する施設に関しての建築計画的な研究ー両毛地域の既存施設利用の実態を踏まえてー	吉田佳代	足利工大	2003
	小児病室の療養環境に関する建築計画的な研究	安川さち子	足利工大	2003
	地方都市の中心市街地を流れる都市河川域の空間構成に関する研究	清水郁夫	足利工大	2003

農村の有する資源が多角的な視点から評価されるなかで、それらを取り巻く研究も多様化している。そこで、近年の博士論文をテーマに、論文の概要とその後の取り組みを紹介していただき、いま注目されている農村計画研究について語るとともに、農村計画が目指すビジョンについて意見交換をした。



すでに、北海道大会では、若手研究の顕彰と最新の研究関心を把握するため、各セッションから一押し発表の推薦をお願いし、農村計画ホームページに掲載

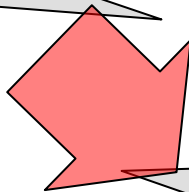
若手研究博士論文・修士論文リストも、農村計画ホームページに掲載



若手研究者の育成

04年度農村計画委員会予算

136.6万円



05年度農村計画委員会予算

126.9万円

ホームページ・メイリングの充実

地方での公開研究会

若手研究者の育成

成果の刊行 / 集住の知恵

集落型災害復旧支援 = 連携し 大会PD

大会協議会 = 集住の知恵

韓国で日韓研究交流 アジアへ

美しい農村集落デジタルアーカイブ

**05年度**  
各小委員会  
は成果を集約、自己評価  
を行い

**06年度**  
大幅な改組